

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：82611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K03166

研究課題名(和文)学童期の注意欠如多動性障害への自己理解促進ツール『エディとハーディの一日』の応用

研究課題名(英文)Next development of "A day of eddy & Heardy", a tool for children with attention deficit hyperactivity disorder to promote their self-understanding

研究代表者

荻野 和雄(Ogino, Kazuo)

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部・研究生

研究者番号：90762237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：注意欠如多動症(ADHD)児への口頭での診察や文字のみの質問紙では、自身の症状について本人がうまく表出できず、また自己理解が進まないこともしばしばである。このことへの配慮は子どもの権利や自己決定を尊重する観点から重要である。
以前の研究で、ADHD症状を描いた独自の絵本式イラストツール『エディとハーディの一日』を作成し、実行可能性と信頼性を確認した。
本研究では、それらをWEBで利用できるようにし、またiOS版とAndroid版のアプリの製作も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学童期においては症状の自己評価が難しいため、保護者や教師等の他者のみの評価に基づいてADHD症状の有無や程度を判断していることが時に見受けられる。このことは本人不在となる危険性があり課題がある。
以前の研究で、イラストを用いた絵本式の自己理解ツールを作成し、実際の児童に使用したところ、症状の自己理解が促進されることが示唆された。
今回の研究により、オンラインやアプリなどで広く利用できることになったことは、より多くのADHD児の自己理解が促される機会が増える可能性があり、意義は大きいと考えている。

研究成果の概要(英文)：With only oral interviews and text questionnaires for children with Attention Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD), they cannot express their symptoms well and their self-understanding doesn't progress in many cases. Consideration for them is important from the perspective of respecting children's rights and self-determination.
In the previous study, we created "A day of Eddy and Heardy", a unique picture-book style rating tool portraying ADHD symptoms, and confirmed its feasibility and reliability.
In this research, we made them available on the WEB, and produced iOS and Android versions of the application.

研究分野：児童精神医学

キーワード：ADHD イラスト 自己理解 アプリ 学童期 子ども 発達障害 注意欠如多動症

1. 研究開始当初の背景

注意欠如多動症 (Attention Deficit/Hyperactivity Disorder : ADHD) は、不注意や多動性/衝動性を主な症状とした障害である。DSM-5 における診断基準に『不注意、多動性/衝動性の症状のいくつかは 12 歳までに存在していた』とある通り、学童期からその症状が見られる。ADHD を持つ児 (以下、ADHD 児) は、これらの不注意や多動性/衝動性の症状によって、集団生活や学習面で多くの困難を抱え、周囲の無理解から本人の自尊感情を低下させる対応がなされていることも多く、将来的な不適応を考えると学童期からの適切な支援や医療がなされることは重要である。

ADHD の状態像の把握には、他の精神疾患や発達障害と同様、本人への面接聴取を基本とするが、学童期の ADHD 児では、注意力が持続しないことや聴覚情報のみでは理解が困難であるといった障害特性、年齢的に言語理解や表現が拙いといったさまざまな課題のため、本人からの症状評価の聴取が難しいことも多い。一方評価ツールにおいても、自身の症状を的確に回答することができる妥当性の検証されたツールは乏しく、またそれらも文章を読んで答える形式で質問項目も多く、実臨床での学童期の ADHD 児への使用や施行完遂は難しいと実感している。従って、ADHD の見立てや支援、診断や治療を行なう際、現状は本人による症状評価はあまり重要視されず、聴取がなおざりになり、保護者や教師等による他覚的評価のみに基づく状態像把握となっている。

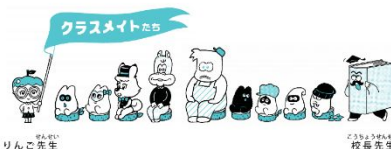
一方、ADHD 児の本人評価を他覚的評価と比較した先行研究がいくつかあるが、本人が自身の症状を過小評価する傾向があることが示され、ここでも本人評価は重要ではないと結論されている。また自尊感情を守るための防衛機能のひとつとして自己の能力を高く評価することが報告されている。申請者が行った ADHD 児への予備的面接研究でも、本人は症状を過小評価することが示された。しかしこれらは全て聴覚情報や文字情報での評価であり、年齢や特性に合わせた工夫を施した評価ツールを用いて本人が評価を行っているものではない。果たして、本人が自身の症状を的確に評価することは本当に難しいのだろうか？ また自己理解の重要性については検討されていないが、自己理解を促進することは重要ではないのだろうか？。加えて、子どもの権利を可能な限り保障する医療倫理の観点から、子どもには自身が理解できる言葉や表現で十分な説明を受ける権利があり可能な限りの配慮がなされるべきであるが、子どもの権利を保障する努力が現状の児童精神医療で十分になされているのだろうか？

これらの問題点を払拭し、等身大の症状の自己評価を引き出し自己理解を促すことを目的として、H28 年度より科研費若手研究(B)で「学童期の注意欠如多動性障害に対する症状の自己理解促進ツールの作成と有用性の研究」(研究課題番号：16K17357、研究代表者：荻野和雄)を開始した。そこでは通常の聴覚情報や文字情報だけではなく、興味を刺激し楽しく行える絵本式のイラストツール「エディとハーディの一日」(下図はその中の一部)を作成した。これは、ADHD の主な 18 症状をイラスト化したもので、子どもの気持ちを引き出す工夫に関する先行研究でなされている、キャラクターを用いる、シンプルな言葉を使う、面接形式とする、スケールを視覚化する、といったことを取り入れて作成した。二度の研究実施によりイラストを適切なものに確定し、実行可能性と信頼性、そして一定の的確な評価を引き出せることと自己理解が促進されることを示すことができた。またその後、実際に臨床場面での使用を重ねてみて、本人・家族の理解が進み心理教育としても有益であると実感もする。

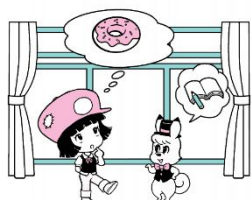
A day of Eddy & Hardy
エディとハーディの一日

いつも元気で少しおっちょこちょいのエディ君とハーディちゃん、このお話の主人公です。クラス担任のりんご先生やクラスメイトたちと一緒に毎日いるんことを経験しています。

これから一緒にエディ君とハーディちゃんの一日をみていきましょう。ふたりと同じ経験、君にもあるかな？ 当てはまるものを教えてね。



05



05

「話 聞いている？」と言われる。



そして今後として、本ツールをさらに発展させ、国内どこでも使うことができるアプリがあると ADHD 児に有益であると考えた。また自宅でアプリを通して親子で楽しくやり取りをする中で、家族で理解が深まり、『悪い障害』との位置づけとせず『自分らしさ』との自己理解につながると良いと考えた。一方小学校高学年以降では、障害受容への悩みや内服への嫌悪、そして反抗期も重なり服薬アドヒアランスが低下することもしばしば経験する。そのため、学童期より自己理解を促すツールを利用することで、これらにも寄与することができると考えた。

またそれらの上で多数のデータを収集し妥当性の検証を深めること、また学童期から自己理解が進むことで ADHD 児の生活の質や自尊感情を高めることにつながるどうかを確かめていくことも重要であるといえる。

2．研究の目的

本研究では、(1)実行可能性と信頼性が確認された学童期の ADHD 児に対する症状の自己理解促進ツール「エディとハーディの一日」を広く使用できるように整備していくこと、(2)本ツールで自己理解が進むことで ADHD 児の生活の質や自尊感情を高めることができることを示すことを目的とする。

3．研究の方法

(1)「エディとハーディの一日」を WEB やタブレット端末などで使用可能なアプリケーション(以下、アプリ)を開発し、国内どこでも気軽に利用できるようにする。システムエンジニアと協議を重ね、より楽しく回答できるような仕様とする。(2) ADHD 児に本ツールを用いての心理教育を行い自己理解が進むことによって、自己効力感や生活の質などの改善が認められるかを検討する。

4．研究成果

本研究では、(1)まず WEB アプリの開発を行い利用できるようにした。また iOS 版と Android 版のアプリの製作も行った。今回の研究により、オンラインやアプリなどで広く利用できるようになったことは、より多くの ADHD 児の自己理解が促される機会が増える可能性があり、意義は大きいと考えている。(2)残念ながら社会情勢から、本ツールを用いた面接を十分な症例数に実施することができなかった。今後も継続して本研究課題を明らかにしていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 M. Ooka, T. Oka, Y. Matsuo, K. Saito, K. Ebishima, R. Kuge, M. Hiratani, K. Ogino
2. 発表標題 A new picture-book style rating tool is feasible for children with attention deficit hyperactivity disorder to reveal their self-understanding
3. 学会等名 23rd World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 M. Ooka, T. Oka, Y. Matsuo, K. Saito, K. Ebishima, R. Kuge, M. Hiratani, K. Ogino
2. 発表標題 Comparison between self- and proxy-reported behaviors in children with attention deficit hyperactivity disorder using a picture-book style tool
3. 学会等名 23rd World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	須山 聡 (Suyama Satoshi) (70758581)	北海道大学・大学病院・特任助教 (10101)	
研究分担者	大岡 美奈子 (Oooka Minako) (70824069)	東邦大学・医学部・助教 (32661)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------